

# たまのよこやま

(財)東京都埋蔵文化財センター報 No.3 昭和59年11月10日

特集

## 多摩ニュータウンNo.5 遺跡



No.5 遺跡「オハヨウテレビ朝日」実況中継風景

今回は十一月十日に遺跡見学会がおこなわれる稲城地区の多摩ニュータウンNo.5 遺跡を紹介します。

遺跡は多摩カントリークラブの東側に近接した稲城市坂浜四十号三三五六番地他にあります。この付近は稲城市では最も標高が高く、遺跡も南を流れる三沢川に向って開析された。谷戸の最奥部、丘陵の稜線に近い部分に位置しています。

発掘調査は、住宅・都市整備公団の宅地造成工事に先立って、今年の四月から開始し、十二月までの予定で進めています。これまでの調査で先土器時代・縄文時代・平安時代・中世・近世の遺構・遺物が多数発見されています。

稲城地区での調査はまだ緒についたばかりで、考古学的にはほとんど未知の地域ですが、この遺跡でも当初の予想をこえる成果が得られていますので、この機会に広く市民の皆様に公開したいと思います。

### 年 表

時代区分	年代	主な生産活動	主な道具	No.5 遺跡	主なできごと	
近・現代	1,860		陶磁器	掘立柱建物跡	・太平洋戦争 ・明治維新	
近世	1,600				・江戸幕府の成立	
中世	1,200	水 稲 農 耕	金 属 器 具	(竪穴住居跡 工房跡)	・鎌倉幕府の成立	
平安時代	800				・関東武士団が出現	
奈良時代	700				・武蔵国府・国分寺がつくられる	
古墳時代	後期				500	・古代統一国家が誕生(東京は武蔵国)
	中期				400	・大陸と交流 先進技術が日本に入ってくる
弥生時代	300		弥生土器	・大和朝廷誕生		
縄文時代	後期	原始農耕?	石 器	竪穴住居跡 集石 土坑	・卑弥呼が邪馬台国の女王となる	
	中期				0	・小国家ができる ・関東でも稲作がはじまる
	前期				BC.300	・大陸から稲作文明が日本に入る
先土器時代 (旧石器時代)	晩期	狩猟・漁撈・採集	縄文土器		・気候が涼しくなる(海退)	
	後期				BC.3,000	・土掘具が多量につくられる ・生活道具が豊富になる
	中期				BC.4,000	・村ができてはじめる
	前期				BC.10,000	・温暖な気候(海進)
	草創期				・土器の使用がはじまる	
					・寒冷な気候 ・野山をめぐり、狩猟・採集の生活	

発行  
財団法人 東京都埋蔵文化財センター  
〒206 東京都多摩市落合1-958  
☎ 0423-73-5296  
0423-74-8044  
昭和59年11月10日

▽十一月十日、当センターが文化財普及活動の一環としておこなっている恒例の遺跡見学会が、多摩ニュータウン稲城地区のNo.5 遺跡で開催されます。本号はこれにあわせてNo.5 遺跡を紹介する特集号としました。

これより遺跡見学会用のパンフレットは、本紙がその役割りを引継ぎます。したがって、遺跡だよりの内容を拡充した特集号がこれにあたることとなります。

▽本号の執筆は、No.5 遺跡の原川雄二、川田壽文、福田敏一の各調査員が分担して担当しました。

▽今月は、国をあげての文化財愛護月間です。見学会を通じ文化財の重要性の認識を深めてください。



遺構分布図

### 江戸時代

平安時代の後、当遺跡はしばらく人が住んでいなかったものと考えられます。それは、当遺跡からは、中世に盛行した板碑と言われる供養塔の破片が一点発見されただけで、鎌倉時代とか室町時代などのこの時期の建物跡、土器などが全く発見されていないからです。



遺物跡

この遺跡に再び人々の生活の痕跡が認められるのは江戸時代に入ってからのことです。この時代になると建物跡や陶磁器・鉄器などの日常品、あるいは貨幣など多くの遺構・遺物が残され、発見されています。

江戸時代の当遺跡は、縄文時代などと異なり、歴史



遺物跡

上は徳川幕府の支配を受け、また、行政的には、武蔵国多摩郡坂浜村に属することになります。従って、当遺跡の人々の生活も、日常的には変わりがないものの、時には幕府からの制約や、村全体との付き合いという面もでてきます。また18世紀後半以降は貨幣経済が発達し、山間の村々にも商品生産物が入ってきます。当遺跡で発見された陶磁器・鉄器・貨幣なども、もちろんすべて他から入手したもので、ここで作ったものも何もありません。どうしても流通ということも考えなくてははいけないようです。

江戸時代の坂浜村には、江戸道と八王子道(大山路)の二本の主要道が通っておりましたが、そのうち当遺跡のそばには八王子道が通っていたと推定されます。これは、隣村である連光寺村から入る道で、当村をぬけ、南の平尾村に続いたようです。当村の人々も、江戸道、八王子道を使って、村内あるいは周辺の村々へと生活の範囲を広げていたものと思われまます。

さて、本遺跡からは、建物跡が三ヶ所発見されていますが、これらはすべて斜面を平坦にした(一段切り)後、そこに家を建てたもの後、そのうち一段段切はかなり斜面を造成しておりみごとなものです。遺物としては、陶磁器茶碗・播鉢鉄クギ・キセル・貨幣などが発見されました。年代は陶磁器の文様・形などから考えて18世紀代のものであると考えられます。播鉢も現在のものに比べると目に特徴があり、その違いは一目瞭然と

No.5遺跡は、南を流れる三沢川に向って開析された「堂ヶ谷」の最奥に位置しており、遺構は谷部とそれを取り囲む丘陵の斜面から発見されています。ここにも見られるように、多摩丘陵には谷戸地形がいたるところに発達していて、他の遺跡の多くも、このような地形のところから発見されることが多いようです。

周辺部の遺跡を概観してみますと、縄文時代の遺跡では、本遺跡の東約二〇〇mのところにあるNo.4遺跡と、東約一kmにあるNo.3遺跡があげられます。いずれもすでに調査されたことのある遺跡で、No.4遺跡では住居跡が発見されていますが、谷部から土坑・集石が発見されています。No.3遺跡は、広い遺跡の一部が調査されたにすぎませんが、中期の竪穴住居跡が二軒と土坑・集石、それに多量の土器と石器が発見されました。それぞれ近接した遺跡ではありませんが、内容は少

しづつ違うようです。

平安時代の遺跡としては、多摩川の村岸にある府中市内の遺跡があげられます。府中は、奈良・平安時代における武蔵国の中心で、国府が置かれた場所です。したがって、府中市内からは国府に関連した遺跡や住居跡などが多数発見されています。一方、多摩丘陵には縄文時代の後期以降、極端に遺跡が少なくなり、弥生時代・古墳時代としばらく空白の時代が続き、再び人が住み始めるのは古墳時代の終り頃から奈良時代にかけてのことです。あるいは、奈良時代に、府中に国府が置かれたことで、村岸のこのあたりに人が住み始めたのかもしれない。

中世の遺跡としては、同じ稲城市内にある大丸城跡(No.513遺跡)が有名です。大丸城跡は中世の山城で、地元では「城山」といわれてきました。遺物としては板碑・陶磁器・銭などがあり、注目されています。

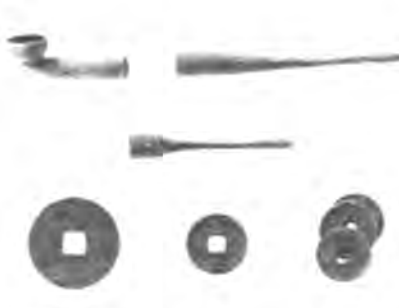
す。これら多くの遺物の中で、3号段切の柱穴から見つかった宝永通宝は、遺構の年代を知る上に重要なもので、また貴重なものです。この貨幣は宝永五年四月に幕府が十文銭として铸造しはじめますが、形が寛永通宝などに比べて大きく、不

く離れたこの遺跡から発見されたのです。

当遺跡の人々は、その後何らかの理由で、ここを離れてしまうわけですが、遺跡の地形が谷の最奥にある点、キセルや貨幣が比較的多く出土する点などを考えると、ここの人々は農業の



陶磁器



キセル・貨幣

便だったらしく、次の年の一月にはもう铸造を中止してしまいました。従って、この貨幣が市中に出まわったのは、わずか九ヶ月間だけで、その量も、それほど多くはなかったと思われるのです。その数少ない宝永通宝のうちの一枚が、江戸を遠

他にも仕事をもっていたのかも知れません。いずれにしろ、人々は藩政村の一員として、また地域の共同体の一員として、18世紀を中心に、日々農業をし、暮らしていたものと推定されます。

先土器時代

この遺跡に最初に足跡を残した人々は、先土器時代に生きた人達でした。この時代は、土器の使用が始まる縄文時代よりも前の時代で、遺物は関東ローム層とよばれる赤土の中から出土します。東京都内でも多くの遺跡が調査され、その年



先土器時代の遺物

代は約三万年前から一万年前くらいまでといわれています。この遺跡から出土した先土器時代の遺物は図示した三点のみですが、右端の石器は石槍とよばれるもので、槍の穂先として使用されたものようです。遺跡の調査では、当時の人々がこの場所では生活していたという痕跡は、これまでのところ発見されていませんので、おそらく、彼等が食料となる動物を追ってこの場所までやって来て、その際、獲物に向けて投げられた槍がそのまま放置されたものと思われる。

縄文時代

6頁に表示した年表にも記してあるように、この遺跡からは、縄文時代のいろいろな時期の生活の痕跡が、種々の遺構や遺物となって残されています。これらの中で最も古い時期のものが写真①に示した遺物です。これらは、すべて底の尖る尖底深鉢形土器とよばれる土器の破片で、当時の人々が食料を煮炊きするのに用いたものです。縄文時代の土器は、縄を表面に転がして文様とすることが多く、写真の中の破片からも縄の文様を見てとることが出来ます。また、右下の破片にみられる鋸歯状の文様は、押型文とよばれる早期に特有の文様ですが、南関東では流行することがなく、この地方で発見されることは珍しいことです。その他、遺跡からは前期や中期の土器も数多く出土しています



縄文時代の遺物 ①



縄文時代の遺物 ③

縄文時代の遺物 ②

が、それらは現在、整理中です。ので、詳しい説明は省略します。縄文時代には、まだ金属製の道具は使用されていませんので、生活の利器はおもに石や骨・角・木などを使用したものと考えられます。遺跡からは石の道具が数多く出土しますが、写真②・③が代表的なもので、石槍や石鏃・石匙・石斧などがみられます。このうち写真②の右端二点は石槍、中央の左上は石鏃です。中央下の石器は石匙とよばれています。用途は現在のナイフのようなものと思われ

ます。これらの石器は、早期や前期のもですが、写真③の打製石斧とよばれるものは、中期のものがほとんどで、使用方法は木を切る斧とは違い、土を掘るための道具であったようです。山芋などを掘るために使われたものでしょう。石器を作る材料は、黒曜石のように遠方から運ばれてきたものもありますが、ほとんどは、この付近で採集されたものです。写真②の左下端の土製品は、前期に盛んに用いられた土製の耳飾で、当時の女性の耳を美しく飾っていたことでしょう。

平安時代

縄文時代の後半以降、弥生時代・古墳時代・奈良時代と人の足跡はみられず、ようやく平安時代になって再び人々が戻ってきました。彼等は八軒の家を造りこの地に住みつきました。平安時代中頃のことです。



竪穴住居跡

発掘調査によって発見された八軒の家は、その構造から三つの種類に分けられます。一つは、写真に示したもので、地面を五〇cmほど掘り下げた、一辺が三mから四mの長方形の竪穴で、

その壁の一边には、砂質の粘土で築かれたカマドが設けられています。床面は堅く踏み固められており、人々が生活していた住居の跡だということがわかります。広さから考えると一家族四、五人が生活していたものでしょう。二つめは、やはり長方形に掘り込んだ家ですが、カマドをもたず、壁の一边に幅三〇cmほどのベツト状の段を設け、床面には直径約一m、深さ六、七〇cmほどの円形の穴が一つないしは二つあり、中には焼けた土や鉄くず、鉄釘などが入っていました。こんな大きな穴が床にあつては人が住むには大変不便利です。おそらく鉄製の道具を作る工房だと思われます。いまひとつは、やはり鉄製の道具を作る工房と思われる家です。この家もカマドをもたず、長方形の壁にそつて三本ないし四本の掘立柱を建てています。柱間は二間×二間と二間×三間の二軒が発見されています。大き

い方からは前述したのと同じような穴が床にあります。やはり中からは鉄くず・鉄製品が出土しています。床面には、幅二、三〇cmの溝が七本あり、火をたいたあとが二ヶ所みられます。二間×二間の工房跡の床には溝はなく、平垣であり、やはり穴が二つあります。



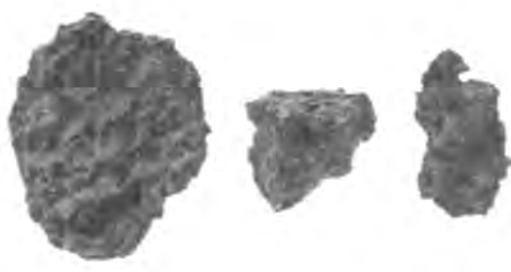
蔵骨器

3号住居跡のすぐ西からは、火葬した人骨を入れた素焼きの小さな蔵骨器(骨壺)が出土しました。素焼きの坯を逆さにして蓋としており、丁寧に埋葬されています。この蔵骨器の内面にはへうで引つ搔いた文様があり、他に類例をみないことから、特に蔵骨器として作られたものようです。この他に出土した遺物は土師器・須恵器・灰釉陶器・緑釉陶器・瓦・多くの種類の鉄製品・フイゴの羽口などです。



須恵器・灰釉陶器ほか

平安時代の住居跡は他の遺跡からも多く発見されていますが、当遺跡のように生活の場である住居跡、生産活動の場である工房跡、そして墓地といった当時の人々の一生を目の当りに見ることができる遺跡は、府中・国分寺などの大きな遺跡以外ではみられず、そういった意味で非常に貴重な、学問的にも価値の高い遺跡と言えるでしょう。



鉄滓(鉄くず)